



大腸がんについて —最新のトピックス—

解説 勝又 健次 消化器外科・小児外科 准教授



大腸がんの早期発見には検診が大切ですが、検診から治療にわたる研究が進み、あらたな可能性が広がりを見せています。それらの最新トピックスを交えて大腸がんの“今”を解説します。

大腸がんの発生を促す環境・生活

大腸がんの発症には環境および生活習慣が関係しています。運動しないで食物繊維を摂らない人は、その逆の人より1.5倍ほどがんになる率が高く、アルコールや肉類の摂取過多や肥満などの要因のいくつかが重なることで大腸がんの発生率は増えます。さらに、加齢に伴う細胞の変異によってポリープができ、そこからがんに変異していくこともわかっています。大腸がんの9割がポリープからがんになり、1割は最初からがんとして発生します。そのため、大腸がんの最大の予防はできてしまったポリープを切除することといえます。

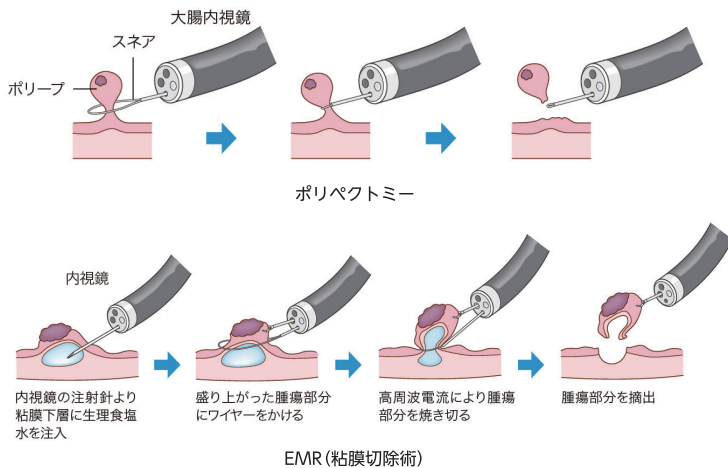


大腸がんの治療

大腸がん治療は進行の度合いによって方法が変わります。

- ①内視鏡による治療はがんが粘膜にとどまっている、もしくは粘膜下層に軽度浸潤している場合に行われます。さらに浸潤が進んだ場合は腹腔鏡手術や開腹手術を行います。

■ 内視鏡治療



- ②腹腔鏡手術は、小さな切開創から腹腔に炭酸ガスを注入して、鉗子やカメラを挿入して行う手術です。傷が小さいため痛みも少なく、また手術操作による刺激も少ないので腸閉塞などの術後合併症の発生が少なく、回復が早いなどのメリットがあります。
- ③抗がん剤治療は、病巣を取りきったものの再発しないように用いる補助療法として、また病巣が取りきれずに残ったがんが大きくならないよう現状維持を保つために用います。抗がん剤のほか、分子標的治療薬といわれる薬も使います。いずれも副作用はさほど強くはなく、外来での治療となります。

大腸がん治療の最新トピックス

● 検便から唾液検査へ

検便は大腸がんを早期発見するための簡便な検査ですが、さらに高い精度の検査方法の開発が課題としてあがっています。そんな中、アメリカで「犬が匂いによって飼い主の乳がんを発見した」というニュースが流れました。そこからUCLAでは、がんの代謝物質を唾液で測定する方法の研究開発を進めています。日本でも当院と八王子医療センターがその検査・研究を進めています。

● 遺伝子の異常が、がん発生の時期を早める

遺伝性の大腸がんは遺伝子の配列の狂いによって引き起こされるのですが、その一方で修復してくれる遺伝子があって99.999%修復されるといわれています。しかし、APC遺伝子に異常があると、およそ1/2の確率で大腸がんは受け継がれます。同族者に若くて大腸がんの人がいるなど、ご心配な方はご家族と相談のうえ、遺伝子検査とカウンセリングを検討してみたいかがでしょうか。

● 新しい分子標的治療薬

分子標的治療薬はがん細胞に栄養を与える血管を破壊したり、増殖を抑えたりします。今回スチバーガという分子標的治療薬が新しくできました。これはがん細胞の増殖と血管が新たに作られることを抑制するという複数の働きをします。これによって、これまで治療の手立てがなくなった患者さんに対するさらなる治療が可能になりました。

● ロボット支援手術 da Vinci

鮮明な3D画像と手震もない多機能なロボットアームによる遠隔操作によって、従来は困難だった体内の狭い場所でも手術が行えるようになりました。当院では倫理委員会の審査を受け、現在までに32例の手術を行っています。今後の展望が期待されます。